

## 第6回教育振興ビジョン検討第1部会議事録

日 時 平成22年3月11日(木) 13:30~16:05

場 所 三重県水産会館 4階 研修室

出席者 (委員) 上島 和久、太田 浩司、加藤 伊子、多喜 紀雄、脇田 三保子  
辻 貢、辻林 操、東福寺 一郎、松岡 典子  
(事務局) 山口副教育長、速水健康福祉部こども局総括室長兼こども未来室長  
松坂学校教育分野総括室長、鳥井社会教育・スポーツ分野総括室長  
岩間教育改革室長、鈴木小中学校教育室長  
高島社会教育・文化財保護室副室長  
福永教育振興ビジョン策定特命監、北原、川上、安田

計20名

### 内 容

#### (事務局)

ただ今から、三重県教育改革推進会議第6回教育振興ビジョン検討第1部会を開催させていただきます。なお本日は西田委員から欠席のご連絡をいただいておりますのでご了承ください。

それでは開会にあたりまして、山口副教育長から一言ごあいさつ申し上げます。

#### (山口副教育長)

会社では人事や決算など、いろいろと年度末のお忙しい中、皆様方には会議にご出席いただき、本当にありがとうございます。

この第1部会は、これまで「特別支援教育のあり方」について、喫緊の課題として5回の会議で集中的に審議をいただきました。1月25日には、「議論の骨子」として部会でまとめていただきましたものを、三重県教育改革推進会議で多喜部会長より報告していただき、議論していただきました。委員の方には、概ね第1部会の方向で同意していただき、良い方向でご議論いただいたと思っています。今日からは、「家庭・地域の教育力の向上」という新しいテーマで審議していただきたいと思います。また委員の方も、新たに3名の方に参加していただくことになりました。

それから今回は、健康福祉部こども局の速水総括室長にも参加いただきました。こちらは家庭や地域を対象に、子育てや子育てを支援していく部署であり、現在は「こども条例」を一生懸命作っていただいているということで、教育委員会と非常に密接な関係のもとに取り組んでいただいています。

今日のテーマ「家庭・地域の教育力の向上」についてですが、教育基本法の改正または教育振興基本計画の中にも、家庭・地域の重要性がずいぶん打ち出されています。また県内5カ所で行った地域別県民懇談会でも、多くの県民の方から「家庭教育が大切である」というご意見をいただきました。家庭教育というのは人間形成の基盤・基礎のところですよ。そういう基盤・基礎でありながら、核家族や両親の共働きで子どもとふれあう時間が少ないとか、あるいは家庭を取り巻く地域社会のつながりも薄くなりつつあるといった社会変化が見られます。そういう中で、家庭教育をどうしていくのか、地域の教育力をどうしていくのか。非常に難しいテーマですけれども、よろしくご審議をお願いしたいと思います。

それから、国の教育振興基本計画では、「縦系」と「横系」という話があります。今話をさせていただいた「家庭の教育力」や「地域の教育力」というのは、社会総体として子どもの教育に取り組んでいこうという「横系」に当たるものです。もうひとつのテーマは、「幼児期からの一貫した教育」で、これは、時系列ということで「縦系」に当たると思います。本日の2つの審議テーマは、幼稚園・保育所から高校・大学まで学ぶ中で、家庭や地域がどうやって子どもたちに関わっていくかという、「縦系」と「横系」の関係になると思っています。今後の教育のあり方そのものとして、教育改革推進会議へ提言していただける、大変大きなテーマだと思いますので、忌憚のないご意見をいただきますよう、よろしく申し上げます。

#### (事務局)

審議に入ってください前に、本日から新たに加わっていただいた3名の部会委員の方がお見えにな

りますので、その方々のご紹介に移りたいと思います。

お手元の資料1、部会委員名簿をご覧ください。順番にお名前とご所属程度で結構ですので、簡単に自己紹介をお願いします。

(辻林)

南が丘の地域代表ということで、この会議に参加させていただくことになりました辻林です。南が丘は平成14年から文部科学省の指定を受けて「開かれた学校づくり」に取り組んできました。平成17年度からはコミュニティスクールにも取り組んでおり、7年間委員長を務めております。地域には多大な迷惑をかけてきたと思いますので、この場をお借りして今後の三重のために参考になるようなことが言えたらと思い、今日はやってきました。よろしくお願いします。

(東福寺)

三重短期大学生生活科学科の東福寺でございます。

私は現行教育振興ビジョンの策定にあたり、起草委員として務めさせていただきましたし、県の生涯学習の審議会にも、2期ほど関わらせていただきました。久しぶりにこういった審議会におじゃまさせていただき、ある意味ワクワクしながら参加をさせていただいています。どうかよろしくお願いします。

(松岡委員)

松岡と申します。MC法人サポートセンターみくみえの代表をしております。子育て支援あるいは子どもたちへの虐待問題、思春期の子どもたちへの支援等をさせていただいています。現在、県の家庭教育向上委員会の委員もさせていただいています。委員の皆様方と一緒に教えていただきながら、参加させていただきたいと思います。本業は助産師ですので、産後や妊娠中のお母さんたちへの支援というところでも、意見を言わせていただけたらと思っています。よろしくお願いします。

(事務局)

どうもありがとうございました。それでは引き続きの方々からも、簡単に結構ですので改めて自己紹介を順にお願いします。

(新参加以外の委員・部会委員自己紹介)

(事務局)

事務局の方も紹介申し上げます。

(職員紹介)

それでは以降の進行につきましては、多喜部会長にお願いしたいと思います。

(部会長)

それでは審議に入りたいと思います。事項書に沿って進めていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

審議事項の一つ目は、審議スケジュールについてです。事務局から説明をお願いします。

(事務局)

それでは3ページの資料2、スケジュールについてご提案申し上げます。今回で6回目ということになりますので、これから第8回までの3回、原則このように進めさせていただきたいと思います。教育改革推進会議からこの部会にいただいている残りの審議テーマが3つありまして、できるだけ前倒して審議を進めていきたいと思っています。繰り返して何度も議論したいという考えもありますので、いただいているテーマのうち、まず「家庭・地域の教育力向上と連携・協力の強化について」と「幼児期からの一貫した教育の推進について」の2つを審議させていただき、次回は「社会教育・スポーツの推進について」を審議し、一通りこなしした後で全体を通じた議論をしていきたいと思っています。なお、必要に応じて第9回の部会を6月中旬に開催するということも、お含みおきいただけ

ば幸いです。

( 部会長 )

只今審議のスケジュールについて、事務局からご説明いただきましたが、何かこれについてご意見はございませんか。

特にございませんようでしたら、今後このようなスケジュールで進めていきたいと思えます。先ほどのご説明にもありましたが、このスケジュールは、あくまでも現時点での想定です。これからの審議状況に応じて柔軟に対応していきたいということですので、ご理解をよろしくお願ひしたいと思えます。

続きまして審議事項の2、「家庭の教育力の向上について」に入りたいと思えます。まず初めに事務局からご説明をお願いします。

( 事務局 )

それでは、資料集の5ページ資料3をご覧ください。先ほどのスケジュールのところでは、「家庭・地域の教育力向上」は一つにまとめてご説明をさせていただきましたけれども、大変範囲の広いテーマですので、「家庭」と「地域」に分けて議論したいと思えますのでよろしくお願ひします。

まず「家庭の教育力向上」について、四角で囲んだところの2行目から3行目にかけて、「近年、核家族化、少子化、共働き家庭の増加、地域の人間関係の希薄化等の環境変化の中で、家庭の教育力の低下が指摘されるなど、社会全体での家庭教育支援の必要性が高まっています」とあります。そうした問題意識の下で、いかにしたら家庭の教育力の向上ができるかというご議論をお願いします。資料の方は、まず「現在行っている取組」をまとめさせていただきました。これは大きく3点に分けてありまして、(1)は、学校の中でやっていることということで、次世代の親に対する教育です。(2)は、現在子育てをさせていただいているご家庭への働きかけや支援ということで、学習機会や情報の提供を行っています。(3)は、社会に対する働きかけということで、「子どもや子育て家庭をささえあう地域社会づくり」として、気運の醸成や父親の育児参加促進の取組を行っています。

次の6ページには、今どういう課題認識を持っているか、問題点・課題として整理してあります。子どもたちの現状については、「従来家庭で教えてきたことが、子どもの身につけていないという状況がある」ということ。それから「核家族化や少子化のため、年齢の違う子どもと接したり、幼い子どもの世話をしたりするような経験が不足して、子どもの教育の仕方とか接し方が分からないまま成長しているというケースが増えてきている」ということがあります。家庭教育にかかる問題としては、「過保護・過干渉・過度の放任・育児不安の広がり、しつけの自信喪失などが懸念されている」ということです。それから「子育て中の親同士が育児について語り合う機会が少ない、地域に身近に相談できる相手がないなど孤立感や不安感、負担感が増大している」という指摘があります。これについては、20ページ・21ページに資料を作成してあります。20ページの「育児不安を感じたことがあるか」という統計では、「たまにある」まで含めると、ほとんどの方が「感じたことがある」という状況です。また21ページの「家庭教育上の問題として、『しつけ子育てに対して自信がない』と答えた世帯の割合」は、どんどん上昇しています。6ページの(2)には「離婚や死別、外国籍、障がいのある子を持つなど、課題やニーズが多様化している」という状況を書かせていただきました。それから、「地域経済の低迷と共に、非常に経済的に苦しんでいる家庭も多くなっていて、子どもに十分目を配れない家庭も増えてきている」ということです。それから「父親の子育てや家庭教育への参画が進んでいない」ということ。「は、いろいろな子育て支援の活動は行われていますけれども、多忙のため行けないとか元々参加しようとしなないとか、支援が必要な人に支援が届いていない」という問題です。それから「虐待のケースが年々増えてきている」ということです。(3)教育委員会等にかかる課題には、「乳幼児を持つ親にとって身近な存在である幼稚園や保育所が、積極的な役割を果たすことが今求められているであろう」ということを書かせていただきました。

議論いただきたい論点は、7ページに大きく3つ整理させていただきました。(1)「次代の親になる若い世代にいかにか教育していくか」。それから(2)「現在子育て中の家庭に直接的な働きかけや支援をどうするのか」ということです。これについては視点を大きく4つ書かせていただきましたが、最初の視点1と2が全体的な視点です。まず1つ目は、「孤立感や不安感や負担感を軽減するために、どんな働きかけや支援ができるのか」という子育て支援です。それから、実は県民懇談会で「家庭がもっときちんとしつけをすべき」という意見を、たくさんいただきました。こうした「一般的な家庭

においても全般的に教育力が低下している」という問題について、いかに働きかけをしていけばいいのかということ視点を2に書かせていただいています。視点3と視点4は、「支援が届きにくい保護者」とか「課題やニーズが多様化していること」に対して、いかに対応していくのかということ。それから8ページに論点の3つ目が書いてあります。これは地域社会づくりをどうしていくのかということで、視点1が「子育てを地域社会全体で見守り育む機運をどのように醸成していくのか」、視点2が「父親の育児参加をいかに進めていくのか」ということです。

以上、こういった視点でご議論いただければと思います。

( 部会長 )

今ご説明にありましたように、「家庭の教育力向上」というテーマで、論点を整理していただきました。これに従って議論していきたいと思いますが、できるだけ論点の順番に議論をいただけたらと思います。なお非常に幅広い問題ですので、どんな意見でも結構かと思えます。お考えになっていることをご自由にご発言いただけたらと思います。

せっかく整理していただきましたので、最初の「次世代の親になる子どもたちへどういった教育を行っていくべきか」というところから入っていききたいと思います。いかがでしょうか。

( 委 員 )

私は、三重県医療審議会「健やか親子推進部会」にも出席させていただいて、「高校生の親育ち支援」も取り上げています。この間の会議で、産婦人科の先生が「三重県は10代の出産や中絶が多いということの問題にすべきだ。交通費さえいただけたら学校へも教えに行くので、中2の夏休み前ぐらいには全校でぜひそういった教育を進めてください」と言われました。最近の児童虐待の事件を見ていると、親になる準備ができていないうちに子どもができてしまっている。私が以前警察署にいたときには「中絶すると自分の体が傷つくのが怖いから出産した」と言っていた女子高校生もいました。行き過ぎた性教育というのもあって少し躊躇する面もあるんですが、そのあたりをきちんとしていかないと、どんどんそういうことになってしまわないかと思えます。出産も性感染症もエイズの問題も心配だと思えます。

( 委 員 )

今、親になることに対してネガティブな情報が非常に多くて、親になりたがらない若者が増えていると思うんです。社会全体で見ると少子化という大きな問題にかかってくるんですけど、まず親になること、子育てのすばらしさというものを伝えていくということが、前提として必要なんだろうなと思うんです。

( 部会長 )

「子どもを育てていくこと」は非常に大事なことになるので、まず学校において、次世代の親になる子どもたちが、親になることを肯定的に捉え「子どもを育てていこう」という気持ちになるような教育をしていただきたいと思います。こういう趣旨のご発言だったと思いますが、この議論をもう少し深めていただけたらと思います。何かご意見ございませんでしょうか。

( 委 員 )

私には今、大学1年生、高校2年生、中学2年生の子どもがいます。ちょうどご発言のあったような時期に当たっています。心理学を勉強していたものですから、子どもたちには、小さい時から「親になるのはどういうことか」というのを、朝ごはんを食べながらでも話してきました。その中で「家庭のあるべき姿」も当然伝えてきたんですが、もう一方で「お父さんやお母さんから離れていくんだよ」ということもよく言います。どういうことかということ、「経済的な自立をまずしてもらわないと困る」ということで、「そのためにはこう生きていくんだ」という話をします。親になるということは、結局は「人生において自立の第一歩を華々しく迎える」ということなんでしょうかと思えます。ですから先ほど言われたように、「親になるということはどれだけ喜びであるのか」「家庭を持つということはどれだけすばらしいことか」ということを伝えてきています。ただ、娘には「できちゃった結婚だけはゆるさん」と毎年言っています。周りの友達に既にそういった子もいます。なんとかおじいさんたちともうまくやっているようですが、大変だろうなと思えますし、実際大変だという話も聞きます。ストップをかけなければならないところは、嫌がられても親がきちんと言わなければいけないと思

ますし、「ここはこうしていきなさい」という方針は、親が言ってあげるべきだろうと思います。

ただここで議論すべきなのは「家庭の教育力向上に向けて、学校においてどのような教育を行っていくべきか」ということですので、そのあたりのところをもう一度確認するという意味で、みんなが価値観を共有できるようなもの、これから子どもたちが大きくなっていく時に「どうなったらうまくいっているのか」というイメージができるものを、うまくいった事例やうまくいかなかった事例などを含めて学校で提示できれば、分かりやすいのではないかと思います。それがあある意味偏った価値観に基づくものになるかも分かりませんので、様々な価値観をもった事例をいくつも示しながらやっていくということが大切なのではないかと思います。

私が一番大切に思っているのは「自立」です。経済的にも精神的にも自立をしていくということが、親になっていくということだろうと思います。そこを中心的なテーマとしてやっていただければ、現役の親としてありがたいと思います。子どもには親が言うより第三者から言っていただく方が、大変効果があるだろうと思いますので、ぜひお願いします。

(委員)

私も高校3年と中学3年の2人の子どもの保護者です。まず論点を見せていただいて「誰が足掛かりを作って、誰がやるの」と思いました。先ほどから性教育問題などが出ていますが、「学校教育の中で何ができるのか」ということを考えると、背中を見せるのは若い保護者の親に当たる私たちの年代かなと思います。それでは、子どもにその背中を直に見せる場を、誰がどうやってつくるのかと思います。例えば最近、コンビニの前で若い女の子でも股を広げて平気で物を食べています。それを誰が注意するかというと、誰も注意しないんです。どうして注意しないかということ、30代のお父さんから「面倒だ」「邪魔くさい」という言葉が返ってきます。注意することすら面倒になっています。「悪いものは悪い。良いものは良い」ということをはっきりと言える私たちが見本を見せないと、いくらきれいごとで話しても、なんにもならないと思います。

(委員)

親講座の中で、小中高と「性と命の教育」という出張講座を、年間30から40させていただいている立場から、申し上げさせていただこうと思います。子どもたちが性の問題に突き当たるのは、思春期にはある意味当然で、健全であるということをもっと前提におきたいと思います。実際子どもたちには知識がありませんので、望まない妊娠や性感染性といった、リスクと言われているところへどうしても入ってしまいます。しかし知識があっても、思春期の特性や、あるいは家庭や社会の反発心から性行為をする子どももいますので、そういう多面性を捉えて、教育において知識だけはばらつきのないような形で、子どもたちに伝えなくてはならないと思っています。

三重県内相当行きましたけれど、学校教育の中で性に関して充実してやっているところは、そんなにはないと理解しています。そういうところに、専門家と言われる産婦人科の先生や、われわれのような助産師など外部の講師を招いて、しっかりと伝えていくという方法をとることも良いのかなと思っています。

親になった後の子育ての楽しさは、どんどん伝えていってほしいですが、妊娠に至るまでの行為が、生物学的に親になる前の段階であって、望まない場合は避けられるんだということを、しっかり伝えていってほしいと思います。その選択は実は自分自身がしっかりできるはずで、自分自身が「NO」と言えるはずだということを強調して、高校生の親講座をさせていただいています。学校教育でまず知識をしっかり教えて、どういう状況になったら「NO」と言うのかを、具体的に教えていただくことと非常にありがたいと思っています。

(委員)

今、性教育についてお話がありましたけど、具体的なお願いとして、今どうも家庭科の授業が軽視されているように思うんです。本学では、中学校教員の家庭と社会の2種免許が取れるんですが、家庭で教育実習に行く場合、中学校側から「家庭科の専任教員がいませんから」というような理由で断られてしまうんです。家庭科というのは、ある意味生きていく上での基本的な教科だと思いますので、そこをもう少し重視していただきたいという気持ちがあります。

(部会長)

今、お話がありましたように、性教育に関する教育も大事ですが、もう一つ「子どもはどう育て

いくか」ということを、教育の場で学んでいただけたらと思っています。赤ちゃんの時から体が育つとともに、子どもの心はどのように育ち発達していくのかということ、学ぶことが必要だと思います。そのような機会がなくて、親になってしまうことが多い現状ではないでしょうか。

また、教育の中で子どもたちが赤ちゃんに接する機会があれば非常に嬉しいことです。「赤ちゃんや幼い子どもを抱っこする」ことが許されれば、是非体験させて欲しいものです。さらに、自分の受け持った幼い子どもが、どのように育っていくかが分かるように、経過を追って接することが許されれば一層興味が湧くことでしょう。自分が幼いときこのように育ってきたんだと身近に感じることでしょし、また大人になって自分の子どもをさずかるときに、子どもへの愛おしさも一層増して、良い親子関係を築いていくことに関係していくのではないのでしょうか。

女性はいろいろな教育の機会もあるでしょうし、妊娠されたときに教育を受けやすい環境にあるので、割と馴染みやすいところもあると思うんですが、男性は割と少ないんです。男性は育児に関わる機会が少ないので、それがトラウマになりやすい。これは大事なことだとつくづく思います。出産前の母親教室に男性も呼んでいるんですが、ほとんどいないんです。しかし男性に話をすると非常に良く理解してくれます。小さい時にそういうことを教えておけば、生まれてからお父さんが育児に関わっていただけるようになる。物理的に無理でも、心で母親を支えることができると思います。是非そういう教育を、学校で講師を呼んでしていただけると、嬉しいと思います。

#### (委員)

幼稚園は、定期的に職業体験学習で中学生に来ていただいています。職業体験ということですので、本来なら幼稚園の仕事を体験していただくんですけど、主に子育ての楽しさを子どもたちに味わってもらっています。じかに子どもたちと触れ合ってもらうことで、自分たちが幼児期にいかにか親や幼稚園や保育園の先生に愛情を込めて接してもらったかということを感じてもらうことが、これから親になる中学生にも大切ではないかということで、先生たちには「職業として体験してもらおうじゃなくて、子育ての楽しさや喜びを感じてもらえるような体験にしてほしい」と話し合っています。体験学習が終わった後、中学生が再び幼稚園にやってきて「父や母がこんな訳の分からない私たち子どもを育てくれたのは、すごく大変だなと感じた」というような感想も持ってきます。中学校の体験学習は、幼稚園の方もすごく心待ちにしていますし、中学校も日数を増やしてもらおうと、次世代を担う、親になる子どもたちの教育になっていくと感じています。

#### (部会長)

体験学習では、幼稚園児と接しながら、子育ての楽しさや喜びを感じるとともに、自分が育てられた幼い時のことを思い、両親への感謝の気持ちに満たされるという素晴らしいお話をしていただきました。是非体験学習を進めていっていただきたいと思います。

#### (委員)

実習生が来ると、先生たちは大変なんですけどね。労力がすごく要るみたいですけど。

#### (山口副教育長)

中学校では3日間ぐらいのインターンシップで、地域の保育所やいろいろな事業所などに行っています。「3日間で何が分かるか」と思いますし、「お客さん」で終わってしまうので、「5日間してほしい」と言っています。

インターンシップというのは、「職業を知る」ということで出かけますが、桑名北高校ではこれとは違い、「わくわくコミュニケーション」という取組をしています。桑名北高校というのは、退学者が年間に40人、50人出るような、非常に荒れている学校でした。それが桑名市の福祉部と協力して、保育園を開放してもらって、「1年間、その子どもは私の担当」ということで、園児と交流しています。元々は高校の先生だった、高塚という鳥取大学の医学部の准教授になられた方が考えた、命や子育ての楽しさ難しさを覚えていく取組です。初めはなついてくれなくて、高校の茶髪の女の子がベソをかいていました。その園児が1年間経つと慣れて、今度は分かれるのがつらくなって、遠足も一緒に行くぐらいになります。そういう取組をしていくのが良いのかなと思います。中学校の職場体験も3日間じゃなくて、せめて5日か1週間ぐらいその幼稚園に行って、「お客さん」ではなく、おしっこをもらった子どもの手当ををすとか、つらいことも経験してくると違うのではないかと、というような報告は受けています。保育園なんかでは、福祉分野の協力も要るので、まだそういう学校は少ないです

けど、高校ではこういう事例をどんどん増やしていきたいと思っています。

(委員)

この分野はたいへん大事なことを担っていることは確かなんですけど、実際、現場はどうかというと、大変厳しいものがあります。いろんな形で家庭科や保健、理科等の授業でやっているんですけど、1つは授業時数が少なく、十分に関わってやっていけないという状況があります。本当にじっくりこのことについてやっていく時間がありません。新しい学習指導要領ができて、人としての態度も含めて示されていますが、増えているのは理数や国語関係の時数ばかりです。また一方では、総合的な学習の時間がだんだん減ってきて、そういう基礎基本の上に立った教育をしようとする、現場の先生には大変苦しい状況があると思います。

また一方、昨今の子どもたちの置かれている状況を見ると、片親の家庭が増えています。また家庭に帰って、お父さんお母さんの様子を見たとき、本当に家族って何かないと思います。そういった中で、子どもの受け止め方は、「私もこんなお父さん、お母さんになりたいな」というよりも、「こんな親にはなりたくない」ということの方が多いのではないかという気がします。学校でできる部分とできない部分があります。また大事なことを学校でやっていこうとすると、同じクラスの中で大変つらい思いをしている子どもが居て、その子を前にして指導ができないということもあります。こういう格差もあるということです。子どもたちも少子化の中で、小さい子どもと触れ合うことを楽しみにしていますし、また意味があるとは思いますが、ある程度中学校ぐらいになってくると家庭の状況も分かってきますので、そこら辺は難しいことがあります。子どもを見ても格差があるので、学校としては、無難な形、基本的なところで終えていくことも必要かなと思います。

また先ほど話がありました体験学習も、どの学校でもやっていますが、そういう所に行く子も限られています。いろんな職場、職業を体験する訳ですから、本来なら他の子たちにも還元していく場が必要なんです。自分がやったことを他の友だちに伝えることによって広がっていくのですが、そういう時間が取れないわけです。子どもたちの本心からすれば、そういう小さい子どもに接することを、本当に楽しみにしている訳ですので、そういうことを全体で考えていくことが、これから本当に大事じゃないかなと思います。そういう現場の声なり、切実な現実の姿を文科省なり国の方へも伝えていけるようなシステムを作っていくと、頭でっかちの子どもばかりを作っていくことになると思います。そういう機能を果たさないと、職場体験の本来の目的は何なのかとってしまいます。

いずれにしても、家庭の教育力というのは難しい部分があって、基本的には教育と福祉と連携することも大事なことです。どうやってしていくかという仕組みなど、課題の多いところ。これは避けて通れない訳ですので、早い段階から手を打って、学校がやらなければならないことはなにか、また家庭や地域がしなければならないのはなにか、その辺のことをもう少し明確にする必要があると思います。子どもたちが本当に将来結婚して、「親になりたいな」と思うようになるかどうかは、われわれ大人に責任があるのかなと思います。

(部会長)

課題2番の「家庭教育に対する働きかけ・支援」、3番の「子ども・子育て家庭をささえあう地域社会づくり」について、ご意見をいただきたいと思います。

また、説明にもありましたように、地域別県民懇談会での「家庭が驕をもっときちんとすべきだ」という意見についても、ご意見をいただければと思います。

(委員)

今PTAの形が壊れているのが、大きな部分になるのだらうと思っています。ただ県や伊勢市、自分の中学校のPTAの会長をして、初めから私がずっと言い続けてきたことは、「子どもたちのために何かやろう」ということは当たり前として、一番のポイントは「権利を主張すると同時に、義務と責任を負う」ということなんです。

私個人にも、「家庭の教育力がものすごく落ちている」という認識があります。このごろあまり言われなくなりましたが、「モンスター・ペアレンツ」という言葉が世間を賑わせた頃に、給食費の未払いとか、いろいろな問題が大変クローズアップされました。どれを取っても、保護者自体が大変幼稚化していることが、大変な問題点だと感じています。そのとき私が皆さんの前で言ったことは、「権利を主張することと同時に、義務と責任を負う」ということで、そういうことをしっかりと教えてこなかったのかなと、今さらながらそう感じるがあります。例えば一つ最近の事例ですけれども、PT

Aの加入は自由なので、東京とか大都市圏では以前から退会するという話が多くあったんです。しかし田舎の方は、そういう話がほとんど出ませんでした。ところがこのごろは、朝日新聞なんかで取り上げられたこともあって、この三重県の中でも時々出てきます。確かに任意団体ですから基本的には自由なんですよ。そうは言うものの、学校に子どもを預けてお世話になる。そして地域社会で自分が生きていく。その中ではやっぱり義務も当然発生してくるであろうし、学校に子どもを預かってもらい教育してもらい権利も発生してきます。社会として全体的に、権利に対して義務の意識がすごく希薄だと思うところがあります。われわれPTAとしては、そういうところを若い保護者の人たちにいかに説明していくのか、そういうところを今後しっかりやらないと、そのまま崩壊するのではないかと思います。加入するのも退会するのも、すべて自由なんです。自由だけれども、その地域に住まう自分たちにとっては、地域を担っていく責務もあって、義務も発生してくるということも、しっかりやらないといけないと思います。

なぜこんなお話をさせていただいたかということ、やはり家庭の教育力が大変落ちていて、それを上げていくためには、様々な働きかけを様々なところからやらないと、本当にこの日本社会というのが良くない方向にしかいかないのではないかと、PTAなんかをやっていると感じてしまいます。具体的には、例えば視点1を見ますと、「子育てする親の孤立感や不安感、負担感を軽減」というようなことを書いていただいていますけれども、やっぱり「場づくり」ですよ。そこの地域における場づくりというものを、いかにやっていけるかということなのではないかと思います。これは学校とかPTAとか地域社会とかが連携を取り合って、昔の日本の「村社会」の良い部分だけを取り入れていかないと、これからは難しいのかなと感じています。

痴漢とか、子どもを連れ去って殺したとか、大変悲惨な事故が数年前に続きました。その後に地域の老人クラブの方たちの協力ももらって、三重県の中でもほとんどの小学校の中で見守りの仕組みが出来上がっているのではないかと思います。また学校を盛り上げていくための様々な仕組みが、できているんだろうと思います。ところが、そこに若い保護者の方がなかなか来てくれません。ここが一番のポイントで、そこをどれだけ上手に引き込んでいくかということが、われわれPTAとしては大きな課題だと思っています。ここに出されている「家庭教育に対する働きかけ・支援」ということにおいても、無気力・無関心と言われた人たちと若干年代は違うんですけど、そういった方にいかに働きかけるかが大事なポイントになるのではないかなと実感しています。

(山口副教育長)

委員は学校のPTA役員をしている時に、「子どもたちが楽しいのはいいけれど、PTA活動は保護者も楽しくなければいけないよな」ということを、いつも言われていました。「役員も負担感にならないで、楽しみましょうよ」というメッセージなんです。「親も学校行事活動を楽しみましょう」という視点で、いろいろな行事を組むと、参加しやすいと思います。

(委員)

来やすかったら、そこで場ができて、子育てに対する悩みだとか、言いづらいこともだんだん出てくると思うんです。今はその場がないんですよ。それを何とか作らなければいけない、大きな課題だと、私は思っています。

(委員)

私もPTAを何年前かにさせていただいたんですが、南が丘は地域教育委員会の年間活動の中で、一つの大きな柱として、「地域の子どもを語る会」を開催しています。それは保護者、地域の方、先生方にも集まっていたいてやるんですけど、サブタイトルが「家庭教育をどうするか」なんです。まさしくここにあるんですが、「場づくりは、地域の方々がやる」ということになってくるんです。ただ、「学校や行政がどこまで協力してくれるか」ということなんです。「どれだけ学校開放してくれるのか」という問題もあると思います。私のところでは小中学校しか対応していませんけれども、地区懇談会を各地区でやっても、それではその地区のことだけしか考えないという地区もありましたので、去年から学校に一齐に集めてやりました。各地区で個別にやっていると、人数が少ないんです。特に高学年は「もういいや」となって、人数が少ないんですね。でも学校で一齐にやると、「遊びに来た」「あのお母さんと話がしたい」という理由もあって、非常に大勢集まるんです。駐車場が足らなくなるぐらい、運動場がいっぱいになるぐらい人が集まります。その中でも問題視するのは、家庭教育です。やっぱり学校の負担が大き過ぎるんですね。親御さんの問題でも、すべて学校に転嫁しているこ

とがあります。ひどい親なんかは、「箸の持ち方をちゃんと教育してくださいよ」ということも言う訳です。僕は大体その保護者が分かるので、その地区懇談会へ行って、「箸の使い方を教えるのはまず親だろう。何でもかんでも学校に注文つけてくるな」と話をするんです。先ほど出ていた「モンスター・ペアレンツ」もそうですけど、親を知っている地域の人だったら「あなた間違っていますよ。そんなんで社会に通じるんですか」ということが言える。私たちの世代なんかだったら、地域に一人いましたよね。叱ってくれるおっちゃんが、一人ぐらい居ましたよね。そういう人の存在がまず必要なのかなと思います。やはり年に1回でも2回でも良いので、地域の誰かが「家庭教育を考えよう」というような場をつくる。最初は人数が少ないですけども、年々増えてきます。この人がまたこの人にと伝え合い、「楽しかったよ」ということでやってきたのが現状なんです。ですから、学校は協力してくれるだけで、後は地域がやっていけば良いと思います。

( 部会長 )

躰は「こうしなさい」と父親が言うからする、お母さんに怒られるからする、という面もあるかも知れないけれども、子ども自身「お父さん、お母さんのようにしよう」とか、「こうしていこう」という意識、自律性が育ってくるのが大切ではないでしょうか。大好きで信頼しているお父さんに、お母さんに注意されたり教えられると、気持ちよく従っていけないのではないのでしょうか。良き信頼関係の上に躰は一層効果的なものになっていくのだと思います。年齢が増すに従って、尊敬している先生や地域の方に教えられることも多くなっていくと思いますが、同じではないのでしょうか。躰は子どもが小さいときから家庭が最も大切なところだと思います。

( 委 員 )

子育ての相談を10年ほどして、月に130本ぐらいのお電話をいただきます。その中で今おっしゃった「家庭が躰をもっとすべき」というところで、実は「結局、躰ける役割は母親である自分だ」と思っているお母さんが多いんです。「躰は家庭で」と言われる時に、「家庭」は何を指しているかということ、「母親なんだ」と思っているお母さんが実は多くて、干渉しすぎたとか、「あなたの躰がなっていない」と言われて、すごく悩んで自殺をしかけてしまったというようなことがあります。社会的、世間的に「家庭で躰を」というと、どうもお母さんたち自身も「母親がそれをすべきだ」と思っているところがあるので、ぜひとも「父親も含めた家庭が躰をする」といった社会的なイメージ、価値観を、地域でも学校でも持っていただけたらと思います。

視点4の「経済的に厳しい状況にある」という部分ですが、学校やPTAの講演会に私もよばれて行くんですけども、本当に聞いて欲しい人が来ないんですよ。PTAの方もほとんどの方がそうおっしゃる。「じゃ、その人たちを巻き込むにはどうしたらいいのか」という次のステップが、絶対あると思うんですね。ひょっとして参考になるかなと思って一つお話をさせていただこうと思っているのが、アメリカの話です。若年の10代中盤から後半のお母さんとか、あるいは様々な経済的困難を抱えている女性、ドラッグをやっている女性が妊娠をしたときとかに、その人たちをしっかりと教育しないと絶対に虐待が増えることが懸念されますが、普通にしていたら母親教室やマザークラスには行かないですよ。で、どうするかということ、お母さんたちがありがたいのは食品とかトイレットペーパーなので、1回来るたびにそういうものを渡す。何回か来たらそれがポイントにもなって、チャイルドシート、ベビーシートをあげるということをしています。これは実は寄付で買っているんですが、物を渡すのが良いのか問題はあるのか分かりませんが、そんな産婦人科、医療機関の取組もあります。そういう形で、支援することが困難な家庭や親御さんを、いかにして巻き込むかだと思います。今までと同じように「来ないわね」と言っていては、何年先でも何十年先になってもずっと来ないので、新しい視点で「イベントをすれば来る」「昼食を出すと来る」とか、いろんな機会を利用してお母さんたちにアプローチすることも含めて、もう少し考えてみるとなんとかなるんじゃないかと思っています。

( 部会長 )

お父さんと子どものコミュニケーションが取れると社会性が育つというデータもありますし、お父さんも参加してほしいという気がします。

( 委 員 )

私もそうだと思っているんですが、父親が子育てに参加しないことは残念なことなんです。父親も子育てに参加していくべきだということで、お伺いしたいと思うんですが、県の職員は父子手帳は

配られているんですか。

(山口副教育長)

教員ですが、配り始めました。教育委員会も「子育て支援アクションプラン」というのをやり始めて、2・3年前から父子手帳を配り始めていますが、全員には配っていません。

(委員)

予算的には難しいのかもしれませんが、あれを県全体に広めていくという試みが必要なんじゃないのかなと思います。

(委員)

市町では、母親教室や幼児教室などで父子手帳を配布しているところもあるので、積極的に広まると良いなと思います。

(委員)

今、家庭の教育力を高めるための「場づくり」というお話が出ましたけれど、幼稚園は人間形成の基礎を培う場所で、この時期は基本的な生活習慣や望ましい食習慣、人との関わりや規範意識を育てる一番大事な時期ですので、家庭とか地域と一緒に協力しながら進めていかなくてはなりません。そう考えると、「幼稚園は家庭の教育力を高める絶好の場である」と私は思っています。子どもたちは先生の話をよく聞きます。ただお母さんたちが参観に来ると、べちゃくちゃしゃべって、うるさくって保育ができない状況があったりします。家庭教育の大事さや基本的なことを、どういうふうにお母さんたちに教えていったら良いかと考えたときに、ちゃんとした講師を呼んで講演会をするのも大事かも分かりませんが、逆に子どもたちの姿から学んでもらって、気づいてもらうことが一番早いんじゃないかなと思います。前任の園で「わがまち探検隊」という探検隊を子どもたちで作って、いろんな歴史、文化に触れるような探検をしました。その探検に保護者も一緒に参加してもらいました。子どもたちが地域の方の話を一生懸命聞いている、あるいは道を歩くのに、横断歩道を手を挙げて右左を見て先生の言われるとおり交通マナーもしっかり身につけて渡っている、そういう子どもたちの姿から学んでいただいて、いかに家庭教育が大事か知ってもらおうのが、一番近いのではないかなと思って実施しました。探検に参加したお母さんからの手紙では、「子どもたちがあんなに静かに話を聞いているのになんで親が講演会であんなに話をするのか、すごく恥ずかしくなりました」とか、「普段子どもを車に乗せて走っているときに、ちょっと黄色でも渡ってしまおうとしていたことに、後ろめたさを痛切に感じました」とか、「子どもたちの姿から、改めて親としてのあり方を勉強しました」とか、「地域の人の話の中で、子育ての楽しさや、子育ては自分たちだけでなくても良いとか、地域の人も支えてくれると感じたので、子育てするのも自信が湧いてきました」というような意見もありました。幼稚園は親と密接に関係していて、親との関わりもずいぶんありますので、家庭の教育力を高める絶好の機関だと思います。そういう取組を各園が工夫をしながらやっていっても良いと思いました。

(委員)

家庭の教育力についても、子どもが小さいときからやっていかないと、だんだん年齢が上がってくると極端な場合「式の間だけは顔を出すけれども、他はパス」というような保護者がいたり、なかなか来てもらいたい親が来てもらえないということがあります。就学前教育・保育の間にその重要さを浸透させていながら、「本当はそこだけと違うよ。小学校や中学校でも子どもの成長には保護者の支援は欠かせない」といったことが理解される取組をしていかなくてはいけないと思います。小さい間に習慣付けをしていかなければいけません。もう一つは、通り一遍のことをしていたのではダメで、家庭の教育力が目に見えて「必要だ」と感じるものを作っていかなければいけないですし、「学校へ来ていただくにはどうしていったら良いのか」ということを工夫改善していかなければ、「言っても、来てくれないな」で終わってはいけません。

また一方、行政サイドでも、「学校から家庭教育のことまで、何で言っていかなければならないのか」という意見もあると思いますが、この社会の実態の中、今その必要に迫られています。その一番の原因は、家族関係の崩壊で、お母さんだけでなくお父さんも、おじいちゃんもおばあちゃんも合わせて役割分担をしながらやっていけると良いのですが、それができていません。できていない中で考えていかなければいけないわけですから、そこら辺のことを行政もなんとかしてやっていかなければ

ないと思っています。

実は名張市で教育振興計画を策定しているところなのですが、これからの時代では、やはり「縦のつながりと横の連携」が欠かせないと思っています。特に子どもが小さいときの教育や、家庭と地域が一体となることは、やらなければならないと誰でも分かっている訳です。しかしなかなか来てもらいたい人には来てもらえない。一方では「何かしたいな」「してほしいな」という思いを持っている親御さんもいるけれど、やり方が分からない。うまく満足させ、機能を果たしていく仕組みづくりをちゃんとやらなければいけないと思っています。「学校・家庭・地域の連携」について、具体的に例え小さなこと一つでもPTAや教職員の中で、どうしていったら良いのかということを出し合って、同じ土俵の上でそういった議論をしながら、ビジョンを作る上で次のスタートを切って行動をおこしていかないと、前に進めないと思っています。

(委員)

振興ビジョンの見直しをする上で、家庭教育をどうしていくのかなと思います。「家庭の教育力はどうか」という議論はなかなか難しいなと思って、意見が言えていません。自分の経験から言わせてもらいますと、私の子どもは保育園に行っているんですけど、保育園の職員さんとお話をすると、「参観でも以前と比べるとお父さんの参加も増えている」と聞きます。一方で虐待も増えていて、保護者も多様化しているのかなと思います。なかなかひとくくりで話にくい、まとめにくいなと思っています。そういう中で、一概に「こういう手立てをしたらいいんじゃないか」とは、いろんなことが駆け巡ってなかなか言えません。一概に「全然だめだ」という訳でもなくて、いろんな姿があちこち散らばっているのかなという気がします。私もびっくりしたんですけど、自分の子どもの教育相談に行ったときに、母親しかいないのかと思って行ったんですけど、結構お父さんもいて、「最近のお父さんはすごいな」と思いました。その一方でいろいろな状況の中で苦しんでいる保護者もいるということで、そうした多面性を踏まえると、ビジョンにはすごく大きなことを書いていかなければいけないのかなと思います。

「孤立感」や「不安感」については、私も4歳と3歳の子どもがいますから、まさしくこの不安を感じている8割の方に入ります。うちの連れ合いがよく言うのは、お客さんとかが家に来たときに「かわいいですね」「楽しいでしょう」と言ってくれるんですけど、8割が苦しいんですよ。連れ合いが「ほっとした」のは、「大変ですね」と言ってくれることで、「またがんばろう」という気になるらしいんです。それは楽しい人もいるでしょうけど、良い意味での大変さが大部分で、人の思いもいろいろです。子育てをあまり美化せずに行けば、家庭が元気になれるのかなとおぼろげながら思って、私もそう言うように心がけています。私自身できるだけ協力というか、一緒に子育てしようと思っています。

学校教育の方に話を戻して、「学校教育で何ができるか」と考えると、自分の中では人権教育しか浮かんできません。人権教育をどれだけしっかりするかということです。冒頭にもあった「命に対する教育」とか「性の教育」とかも、私には人権教育につながっていて、仲間づくりの部分です。それは自分の同級生だけではなくて、校種を越えた仲間づくりや、異年齢の仲間づくりでもあると思います。そういう仲間づくりを今まで以上にやっていかなければいけないと思っています。そのときに、現場は本当にそこを中心的に取り組める状況にあるのかというと、「ない」というのが現状で、教職員は苦しんでいるのかなと考えます。

(部会長)

大変議論を進めていただきました。今議論していただいた課題については、さらに別の機会に議論していただく機会がありますので、ここで休憩をとって、その後は次の課題にいきたいと思います。

(14時45分休憩)

(14時55分再開)

(部会長)

それでは再開いたします。2番目の課題「地域の教育力向上と連携・協力の強化について」と、最後の課題「幼児期からの一貫した教育の推進について」について、事務局から説明をいただき、議論をお願いしたいと思います。

(事務局)

それでは簡潔に説明させていただきます。資料4、9ページをご覧ください。まず「地域の教育力向上と連携・協力の強化」ですけれども、このテーマの問題意識は、少子化とか、核家族化とかの流れの中で、「住民の地域社会への帰属意識とともに地域の教育力の低下が懸念されている。地域全体で子どもを育む仕組みを意図的に再構築していく必要がある」ということです。

「現在行っている取組」は、ご覧の通りで、流し読みをしていただきまして、「問題・課題」の方を説明させてください。10ページ、まず「地域を取り巻く社会状況にかかる問題点」ですが、は「地域における子どもたちの様々な体験機会が失われつつある」あるいは「大人が地域の子どもの積極的にかかわろうとしない」、そういったことがあります。それから一方で、「健康で時間的に余裕のある高齢者が急増していて、そういう人材が自己実現を果たせるよう支援していくということが、生涯学習社会の実現にとって大きな課題ともなっている」ということもあります。は、「身近で安全な遊び場が減少していて『居場所』がなくなっている」ということです。(2)の「教育委員会、学校等の取組にかかる問題」については、は先ほどと同じもので、は「学校教育の充実や教員の多忙化の軽減に向けて、外部の様々な専門家や人材を積極的に活用することが重要となっているけれども、そういった仕組みづくりが進んでいない」ということ。については、「学校が地域に向けていろいろ資源を還元して、地域に根ざした生涯学習機関としての役割を果たすことが求められている」という問題意識、課題を書かせていただきました。

論点は、大きく3つあります。1つは「県民参画による地域の教育力向上」ということで、地域の中でいかに教育力を上げていくかという問題です。視点1に書かせていただいたところが、基本的なところ。「従来地域が持っていた教育力を取り戻すために、どのような取組を進めていくべきか」ということです。これは人に着目した書き方なんですけれども、視点2はそれを場所に置き換えて、「地域における子どもたちの多様な体験機会や『居場所』等をいかにして確保していくべきか」。それから視点3は先ほどの家庭の教育力と似たような視点ですけれども、「将来地域社会を担うこととなる子どもたちに、郷土への愛着や社会への貢献意欲を育むために、どのような教育を行っていくべきか」というような視点です。それから(2)は、地域の教育をいかに学校に取り入れていくか、活用していくかという論点で、視点1にその旨を書かせていただいています。視点2は「学校が地域の教育力を活用することで、教育の充実や教員の多忙化の軽減等の成果に確実につなげるためには、どのような点に留意するべきか」という、少し踏み込んだ視点です。それから(3)は、今度は逆に「学校はいかに地域に貢献していくべきか」という論点です。以上が資料4でした。

それから資料5です。今度は「幼児期からの一貫した教育」です。これは大きく2つに分けてテーマを設定しており、「現在行っている取組」を見ていただくと、大きく2つに分かれていることが分かっていただけたと思います。(1)として「幼児教育の充実」です。それから(2)として、幼稚園からずっと小学校、中学校、高校までの「学校種間の連携の推進」という視点です。現在ご覧のような取組を行っているということです。それから「問題点・課題」、これは拾い読みさせていただきますけれども、子どもたちの現状として「幼児の生活に関し課題が指摘されており、幼児教育のあり方が問われています」というのが。はよく言われる「小1プロブレム」、もよく言われます「中1ギャップ」、は「高等学校においても1年生時の中途退学が多い状況にあること」を書かせていただいています。それから(3)「教育委員会、学校の取組にかかる問題点・課題」ですけれども、は「幼稚園と保育所の一体的な対応が求められている」ということ。は「公立・私立の幼稚園や保育所の相互の連携とか、小学校教育との連携が不十分という指摘がある」。それから、は個別の課題で、は「認定こども園の設置が進んでいない」。は「幼稚園や保育所もいわゆる学校評価ということが求められていて、それを進めていく必要がある」ということ。は、「幼稚園教員の常勤講師の資質向上について少し課題がある」ということを書かせていただいています。

論点は16ページに2つ、「幼児教育の充実」「学校種間の連携の推進」ということで挙げさせていただいています。幼児教育についての視点1は「教育内容の充実」、視点2は「幼稚園と保育所の連携」、視点3は「幼稚園・保育所と小学校との連携」、視点4は「幼稚園や保育所が、地域の子育て支援機能をいかに発揮していくか」という視点です。それから大きな論点の2つ目「学校種間の連携」ですけれども、視点1は「学校段階ごとの『節目』の時期において、期待と不安に揺れる子どもたちへの指導は、基本的にどうしていくのか」という基本的な視点です。視点2が「小中の連携」、視点3は「中高の連携」と設定させていただいています。

なお紹介が遅れましたが、今回設定しましたテーマは非常に幅が広くて、横断的なテーマですので、

すでに他の部会、第2部会や第3部会でもいろいろと意見をいただいております。そうした意見を、31ページ以降にいくつかまとめさせていただいておりますので参考にしてください。特に32ページの「地域の教育力」は、教員の多忙化の解消とかいろいろな側面で、既にいっぱい意見が出ています。それから37ページ以降は、県民懇談会においてこれらのテーマに関して県民の方々からいただいた意見の紹介ですので、参考にさせていただければと思います。以上よろしくお願いします。

(部会長)

説明ありがとうございました。それでは2番の課題、「地域の教育力向上と連携・協力の強化について」の、議論をお願いします。

事務局からの説明にありました3つの論点、「県民参画による地域の教育力向上について」「地域による学校支援について」「学校の教育資源の地域への還元について」を中心にご議論いただきたいと思っております。多くの団体や関係者の方々が、学校支援活動をしていただいておりますが、その活動状況などについて、ご発言をいただければと思います。

(鳥井総括室長)

「学校支援地域本部」というのが9ページの1の(2)の にあります。これは文部科学省の委託事業で、学校の中に「学校支援地域本部」というのを作って、コーディネーターを置いて、地域のいろいろな活動を繋げる役割をしていただいております。学校単位で県内6市町11本部作っています。学校で地域との連携に取り組もうとすると、コーディネーター役を学校の先生がしなければならないのですが、大体教頭先生ぐらいがされています。そうすると教頭先生は他の校務もしながら、地域の方々とも連携して、地域の中でいろいろなことをしてくれる方をお願いして、環境整備とか、あるいは授業支援とかをしていただいております。先生が作った問題の丸付けをしてくれる、2、3人が教室の中にいる、そういうことまでしている学校もあります。後は「見守り隊」で、登下校で特に小さな小学校の子どもを見守っていただくという活動をしていただいております。

いずれにしても、学校の先生にこれを作っていただくのではなくて、地域の人がコーディネーター役をやりましょうというのが、学校支援地域本部の基本だと、私どもは思っています。

(部会長)

この活動は、これからだんだん広がっていく、広めていくという計画で進められているのでしょうか。

(鳥井総括室長)

広がっていくというのはなかなか難しいところですが、先ほど言いましたように、今のところこれは国の委託事業で、受けていただく市町教育委員会は、お金を出さなくてもやれるんですけども、その事業が来年度で終わってしまっただけ補助事業に変わるということがあります。それからこの「学校支援地域本部事業」をしていなくても、各市町教育委員会ではいっぱい地域の方をお願いをしています。さっき言いました教頭先生なりが、地域の中に入ってお願いしているとか、地域の方から働きかけがあるとかで、そこはボランティアでやってもらっています。だからこの事業がなくても、うまく転がっていけば、お金を出さなくてもできるということはあると思っています。

(委員)

この「学校支援地域本部事業」は、名張市も1中学校区で受けさせてもらっています。私は、形はそれを基本にしながら、できれば全ての中学校区でもっていきなと思っています。実は1月31日に大阪池田で「教育フォーラム池田」というがありました。小中一貫を目指す中で、この学校支援地域本部事業をうまくとりまとめてやっていくという発表があって、それを参考にさせてもらいたいなと思っています。大変良い事業と思ったのは、その中学校だけでなく校区の小学校も一緒にやっているということで、そうすると先ほどあった「中1ギャップ」に関して、先生が変わってもボランティアで入ってくれる人は同じ人が引き続きとなるので、子どもは安心して学校生活を送れるというメリットがある。子どもの側とすれば授業は授業ですけれども、やっぱりいろんな場に応じてもらえる。また部活動で、小学校できてくれていた人が、中学校でもやってくれる。そういう、安心して学校生活を送れるというメリットをだいぶ強調されていました。ただ池田とか、東京の三鷹の教育長も来ていたんですが、そこらの話を聞くと、なんかやむにやまれぬ事情があるようでした。生徒指導

で大変苦労しているとか、学力の格差が大きいからそれを解消するためとかいうことでやっているとのことですが、いずれにしてもやっぱり地域の教育力と学校を結びつけるということは、大事なことはないかと思っています。「手っ取り早い」というと語弊がありますが、いわゆるやりやすい。その気になればやれるのではないかと思います。と言いますのも、最近では学校支援ボランティアさんが、いろんな学校でたくさん入っている状況だと思います。それはその学校だけでやっていますが、一つの市、あるいは最低でも中学校区でやれば、子どもにとっては「顔の知った人が来てくれる」という繋がりがあって、大変良いことではないかなと思います。そのことを名張市でもやっていきたいなあと思っています。

そのフォーラムの中でも出ていましたが、今は国の委託事業で、国が10分の10負担してくれているんですけども、その事業の中で学校側と地域の両方のコーディネーターを置いているということです。それ以外は全部無償のボランティアということですが、コーディネーターだけは有償で経費を使ってやっている。そうしないと回っていかない。これがきちんとできていたら、学校もうまくいくし、ボランティア同士もうまく機能していくということです。いずれにしてもシステムづくりをきちっとやっていくことが何より大事です。そのシステムができるまでは、行政がある程度リードしていくところはリードしていくことが必要で、最終的には自立させていく。そういうスタンスをきちっと組み上げていくことが、大事じゃないかと思っています。地域の教育力との結びつきに向けては、こういうことをどんどんやっていく必要があると思います。しかしコーディネーター役の方に「お任せ」では長続きしないと思いますので、良い機能を果たすためにはどうしたらいいのかという仕組みづくりを、行政、現場、働いてくれるボランティアの人たちの声を聞きながら、まとめていくことが大事じゃないかなと思います。

(委員)

学校支援ボランティアというのは、どのようにしてお願いしているんですか。

(委員)

私どもがやっているのは、現時点では、学校が地域の「まちづくり協議会」等へお願いしているのが一つ。あとPTAが募集します。あるいは市全体で、市の広報を通して「こういう支援のボランティアを募集していますよ」ということを、一斉に呼び掛けています。その窓口は基本的に学校となります。「どこの学校でも良いよ」と学校の特定をしない場合は、教育委員会に申し出てもらったら調整しますとしています。先ほど「中学校区」と言いましたけれども、名張のような市でしたら、ゆくゆくは「市全体」で、何曜日の何限目には、どんなボランティアがどんなことしているのかをまとめて、うまく組み合わせてやっていくべきではないかと思っています。これはまさに学校と地域を結びつけるもので、教育委員会だけではできませんから、市の総合教育センター構想の中にそういうボランティアの担当部署も入れるなど、タイアップしながらできる組織を作っていこうと考えています。一気に全部できませんから、徐々にそういう段階を経て作れたら、と思っています。

今は基本的に各学校単位で学校支援ボランティアを募集しています。そしてあるモデル地域のところでは、中学校区でやっています。それをゆくゆくはすべてを中学校区にし、最終的には市全体にもっていったら良いんじゃないかなと思っています。

(委員)

学習ボランティアの活動内容については、地域を越えて情報交換する機会はあるんですか。

(委員)

モデル事業とかがついていますので、「成果発表会」というのも持たせてもらっています。

(鳥井総括室長)

いろいろなボランティアの方がいらっしゃるというお話ですが、他のところの具体的な事例を少し紹介しますと、募集をするのに広報を使ったり、企業の方とか大学をターゲットに絞って連携をしているところもありますし、老人クラブにお願いに行っているところもあります。民生委員と連携を図れたという報告も受けています。地域の中で「そういう活動をしたい」と思っているところにうまく働きかけて、そことタイアップしている場合もあります。あるいは昔から子どもの遊びとつながっていた団体が核になって、「学校支援地域本部」に広がっているところもあります。そういう具合に、地域

の特性を踏まえてボランティアの方を探している状況です。

(委員)

学校が主体になって探すとなるとちょっと苦しいと思うので、先ほどおっしゃったように市全体とか、あるいは県全体で探すという取組が、今後必要なのかなと思います。

いろんな社会教育の事業がありますので、そういう事業に参加した方々に声をかけて、協力していただくというのも良いのかなと思います。

(山口副教育長)

「金の切れ目が縁の切れ目」ではないということで、地域ファンドをやり始めたという例もありますね。

(委員)

南が丘は、17年度からコミュニティスクール、運営協議会を立ち上げていますが、教職員は一人も入っておりません。15人の委員は、すべて地域の人です。一番巻き込むべき連合自治会長さんをまず巻き込んで、それから地域の団体もすべて巻き込んで、小中一貫の連携上、中学校の教職員とPTAからも参加を呼びかけはしていますが、みんなすべて地域の人です。ただ事務局はどうしても小学校になります。本来中学校区でやると、3つ4つの小学校でもっと大きくて楽しいんですけど、南が丘は1つの小学校、1つの中学校なので、小学校単位になります。

南が丘は夏休みを利用して、地域の方々のいろいろな力を借りています。32講座ぐらいで、約800人ぐらいの児童・地域の方々が参加しています。その中には、家庭教育である着物の着付けとか、針の使い方、ナイフを使うとかの講座があります。それから普通の一般の授業ですけども、南が丘は選択教科を設けていまして、その中でもミシンの使い方とかいろんな教科を設けています。琴もあります。

スムーズに中学校へ行けるように、高学年に対しては教科担任制も設けていますし、新しく1年生に入りやすいように幼小の連携もして、全てにおいて「地域の学校」となっています。資料に書いてあるように、教職員の人事権とか、「学校方針」に一定の権限は持っていて、ここがPTAとの違いなんです。PTAは協力者という形ですけども、コミュニティスクール、学校運営協議会というのは、一定の権限を与えられています。県の方から「もっと人事権を使え」と言われるんですけども、市の教育委員会と相談して私どもは「人事権」という言葉ははずしました。上位の法律にはちゃんとあるんですけども、これを謳ってしまっていたら人事権を使いたがる人間が出てくると、地域がめちゃくちゃになりますので、あえてそれははずしてあります。南が丘は、団地ができて2つの旧の小学校区がくっついてできたところなので、元々非常にやりにくい地域だったんです。ようやく一つになって、地域が学校を応援する形になってきました。先ほどおっしゃっていたお金の件ですが、地域にある商店でお金を使うと1%をフィードバックしてもらおう仕組みにしています。パーマ屋さんとかケーキ屋さんではポイントカードを押して、そのポイントカードの合計額の1%をいただくという、ファンドを作り上げました。また、そのファンドで一番恩恵をこうむるのは児童生徒です。その児童生徒のPTA会員の方々から、1ヶ月100円集めています。これは英語科の教材費用とか、選択教科の教材費用に使うんですが、年間120~30万円集まります。でもお金集めだけが目的じゃないんですね。株式会社のように地域住民の方に株主になっていただき、学校に興味も持っていただくと、絶えず学校に足を運んでいただけるようになる。それが地域と学校の連携を図ることになる。また地域でいえば、地域の教育力の向上になると思います。

(委員)

私は、学校支援地域本部会議の委員でもあるんですが、これから補助事業になって、お金がどんどん切れていくんですね。金の切れ目が縁の切れ目になる可能性が高いという話を、内輪でも議論しているんです。ただこの2月18日に、6市町11本部の2回目の発表会がありました。たった1年なんですけども、あっという間に格段に成長されて、どの本部も素晴らしい発表をされていました。内容としてはだいたい良く似たことをやっています。図書館ボランティア、美化奉仕作業、見守り等々、だいたいこの3つがよく似ています。後はその地域において、様々なものをやられています。中には先生のマルバツつけの補助や、英語というのもありました。他地域の英会話のボランティアがボランティア募集を見られて、「他地域なんですけど、行ってよろしいか」という問い合わせあり、来ていた

だいているというお話もありました。大変すばらしい広がりを見せていて、大変良いものに育ってきているので、「つぶしたくない」という気持ちが最終的には芽生えてくるんだろうなと思うんです。ただまったくお金が無かったらなかなか難しいことなので、どういった収益事業を行えばこれを永続的に発展できるかが、今後の課題になるだろうという議論をしています。ぜひとも委員にはその辺のところの仕組みを、お話いただければ良いですよ。本当にそう思いますよ。

そのときにある委員から、「ライオンズクラブとかロータリークラブというのは、そういう寄付をするお金持っていますよね」という話が出まして、「確かにありますよ」という話になって、「言ってみたら『出す』というクラブもあるんじゃないですか」というお話もさせていただきました。

(委員)

先ほどの家庭の教育力、また地域の教育力にも関わってくると思うんですが、実は私は平成18年に県の教育改革のメンバーと、アメリカの方へ先進地視察に行かせていただきました。そこで感じたことは、日本とアメリカは全然違うということです。私の行かせてもらったのは、オクラホマ州とミネソタ州ですけれども、2つの州とも学校へ入らせてもらうと、いっぱい人がいるんです。「今日は授業参観みたいな、何か行事でもあるんですか」というと、「こんなのは普通です」という返事でした。スケールが全然違って、一つの丘が学校全体になっているんですけれども、そこにいっぱい人が居るんです。これ、みんなボランティアなんです。「PTAの会員は教育ボランティアをしなければならない」という義務制度があるんです。州によって日数は違いますが、年に3日とか5日とかあるんです。学校の規模も大きくて、小学校でも子どもが1000人から1500人ぐらいいるんです。そうしたら年間に3日とか5日とすると、かなりのトータル日数になってくるわけです。そういう人が学校へ毎日入るといって、きちっとした制度になっています。先生は子どもと直接関わることをやっている。そういうことを州が決めて、そういう制度に沿ってどんどんやってもらっている。社会の仕組みが全く違うんだなと思いました。こんなことは日本ですぐにはできないと思いますが、せっかくボランティア休暇という制度もあるわけです。災害の時だけじゃなくて、義務教育の間の教育ボランティア制度というものを、アメリカを見習えではないけれども、これだけ先生方が疲弊している中で、考えていかなければならないのではないかと思います。校長先生に聞かせてもらうと、現実の毎日の大人の数をみると、2/3が学校の教職員で、1/3がボランティアの人ということでした。もちろんセキュリティは万全で、校舎の中は自動ロックになっていて入れませんが、丘全部が学校の敷地で、どこからでも入れるんですね。安全面で「アメリカの銃社会の中で大丈夫かな」という思いはしました。保護者は数が多いですから、臨床心理士や看護師がいて、それぞれが待機する部屋もあって、外で草刈りや枝打ちもやっています。また経験がある人は、テストの採点をしたり、コンピュータで成績や平均点をはじき出したり、すべてのことをやっているわけです。そういうボランティアをうまく回していく役目をする人は、学校として3人くらい雇っていました。そういうことを考えていったら、本当に大胆なことですが、日本も何らかの方策を打ち出していけないと、回っていかないのではないかと思います。学校だけでなく、幼稚園でもある程度そういうことを考えていく時代ではないかなと思っています。全国に先駆けて、三重県が先進的に県の条例なりを作ったら、一気に数多くできませんけれど、かなり変わってくるのではないかと思います。そのボランティアにお父さんが入ってくると、大分違うと思います。そういう取組を進めることで、自然に学校は学校としての機能を果たし、親は親で集まって親同士のつながりもできるようになる。その辺の仕組み、制度が日本でもとれたらなあと思っています。議会でもそんな質問があったので、「やったらどうですか」と話したら、「金が無いからできない」と言われましたけれども、金だけでなくそういう制度ができれば、可能な部分があると思うんです。三重県が全国に先駆けて取り組んだら、注目されて先生方もやる気になって、相乗効果がかなり上がってくるかなあと思いました。

(委員)

私は本当にそう思います。先生方は本当にがんばってもらっていますけれども、何とか教育、何とか教育、何とか教育っていっぱい求められて来ますし、それから発達障がいの問題もありますし、それをみんな先生がするというのももう無理だと思います。保護者対先生という今の構図だといろいろな面で難しい。昨日も一昨日もトラブルがありまして、子ども同士は解決するんだけど、結局親同士のことになってしまって、午後11時過ぎまでもめていました。本当にそういう面で、専門的な方とかに助けをいただきたいなと思っています。

(委員)

ここの論点の(1)に「地域の子どもを守り育てる状況をいかに創出するか」とありますが、「子どもを守り育てる」というよりは、子ども一人一人は権利の主体者なので、子どもをきちっと社会の一員として認めて、地域全体はそれを支える立場なのかなと思うんです。先ほどおっしゃった保護者同士のトラブルというのは、自分の子どものことだけで、「全体で全体的子どもを」という視点がないからそうなると思うんです。「守り育てる」という視点でいくと、どうしても個々の子どもも「保護の対象」となって、一人の保護者も自分の子どもを「保護の対象」と捉えてしまう。そういう社会構造だと、保護者同士のトラブルももっと広がっていくのかなと思います。やっぱり子どもを「権利の主体者」と捉えて、社会が支えていくと捉えるのが良いのかなと思います。私はそういうふうにつまみながら、ずっと考えていました。

「子どもの育ちとか、子どもの育つ力、生きる力も合わせて、それをきちっと地域全体で支えていきましょう」と考えたときに、地域の人、私も含めて保護者が、自分の休暇の日に地域の活動に向かっていく余力が残っているかということ、自分はあれしたい、これしたい、ゴルフしたいとかありますけれども、いろんな意味で余力が残ってない部分があります。何故かということ、多くの保護者は仕事をしていますよね。それが義務的に働いていて、日々いろんな競争とかもまれながらやっておれば、休日に「さあ一息つこう」と思ったときに、「地域に出て行きなさい」と言われても、圧力になってしまいます。しかし自分の自己実現につながっている職業についていけば、自分の休暇の日ももっとも地域活動につながっていくのかなと、頭の中で思うんです。大きな話ですけども。子どもの教育に立ち返ると、誰もみんな結果的に何らかの労働なりに就くわけです。教職員の立場で言いますと、「労働というのはこんなに尊いんだよ」とか「こんなに素晴らしいことなんだよ」という価値観を、もっともっと教えていかなければいけないと思います。先ほどキャリア教育とかインターンシップとかありましたけれども、それももちろんなんですが、もっと奥深い部分で、社会の構成員として労働というのはどういう位置づけがあって、それはどれだけ尊いものであるとか、いろいろな職業はすべてそれぞれにやりがいがあって、それぞれに役割があるとか、そういうものが身につくような教育が必要なのかなと思います。社会のあり方を根本的に変えていくにはそこなのかなと思います。僕らはいわゆる「労働教育」と言っているんですけども、これから学校教育は、その部分にしっかり取り組んでいくべきと思っています。そうすると「守り育てる」というよりは、「学校だけではなくて、子どもを社会全体で支えていきましょう」となってくるのかなと考えています。

(委員)

今の話ですが、学校の先生だけでは職業の尊さとか、他の職業の中身は分からないわけですから、いろんな人が入ってもらうことによって、幅を広げることができると思います。先ほどのアメリカの話に戻りますけれども、スーパーコンピュータの社員の方がボランティアに居て、年間に5日入ると分かったら、学校は「こういうことをしてもらおう」と、カリキュラムも組んであるわけなんです。学校の先生とは違うけれども、「こんな素晴らしいことができるんだ」と、中学生の子どもたちがものすごく楽しみにしているとおっしゃって見えました。先生がやらなきゃならない専門のこともありますけれども、限界がありますから、そういうものはいろいろな人の力を借りてやっていく。それが学校へ来てもらってやってもらえたら、それに越したことは無いわけで、そういう仕組みがあれば、相乗効果が上がっていくと思いますね。

先ほど言い忘れましたけれども、一日中ずっとボランティアばかりしていただけませんから、どこかの時間で学校の現状をきちっと話をしたり、一日に何百人と来ていたら全員の懇談会はできませんので、グループに分けて話し合う時間も取っているということでした。そうしたら学校のことを全部オープンにし、また学校の様子見てもらっていますから、気心知れた状態でいろんな話ができる。これが私も大変気に入ったというか、感動した部分ですけど、何か一つでもそういうものが、日本でも取り入れられないのかなと思います。その橋渡し役として「学校支援地域本部事業」が、少しでも担える部分があったら良いと考えています。

(委員)

ちょっと確認したいんですけど、制度上、学校にそういうボランティアをどんどん入れるのは可能なんですか。教育支援とか学校環境支援とか、いろいろなボランティアが学校内に入ってもいいわけですね。

(委員)

その人が直接教えるとなると、これは資格なので免許が必要になります。

(委員)

補助は結構ですよ。

(委員)

結構です。

(委員)

例えば、チームティーチングのような補助であれば結構ですよ。それをやるかどうかは、学校長がいかにか門を開くかですよ。南が丘の場合は、学習支援ボランティア、コミュニティネットということで、地域連携部の下に組織があるんですけども、150名ぐらいのボランティアがいます。学校にはその1割から2割ぐらいの方が絶えず来ていただいている訳なんですけれども、清掃を教えるボランティアとか、算数を教える補助の先生とか、英語を教える先生とか、いろいろな先生が入りするわけです。初めそれがどこまでできるか質問させていただきましたが、学校長の考え方一つで、ポンと学校をもう少し開放してくれるだけで、悩むことなく先生方のフォローもできるかなという気もします。

(委員)

それはなかなか難しいところで、今はチームティーチングでかなり抵抗なく入っていただいているんですけど、先生方の意識はいろいろあります。やっぱり「自分のエリアは守りたい」とか、「侵してもらいたくない」とか、「責任を持ってやりたい」という部分があったりして、その辺の共通理解を図るといのは大変難しいことです。おっしゃる趣旨は良く分かるけれども、現実じゃあ学校に入ってもらったときどういう声が出るかということ、「打ち合わせをするのに時間がかかるじゃないか」「この忙しいのにそんなの困る」という場合もあります。だけどそれを言い出したらきりがありません。「じゃあいっぺんやってみよう。ダメならダメで次また改善する道を探ったら良いじゃないか」というように、校長がリーダーシップを発揮して、学校側としての共通理解を図ってもらおうと良いのではないかと思います。そこへ行くまでの段取りとか仕組みを上手にしないといけないわけで、行政サイドがそれをバックアップできれば、校長先生としても心強いかなと思います。

(委員)

どちらもだと思っんですけど、労働時間と心労的な部分、どちらを見るかですね。市の教育委員会によりまして、南が丘はこのコミュニティスクールになる前までは、三重県で一番クレームの多かった学校らしいんですよ。このコミュニティスクールが始まって、ボランティアをどんどん学校に受け入れたところ、ほとんどクレームが無くなったということです。民間人校長を入れて学校改革しようということをやったんですけど、先生方に聞くと「労働時間とか、労働力とか時間はかなり費やしていますけれども、保護者の方からクレームが来るとか、その辺の『心』の心配の部分は一切なくなったので、すごく楽になった」とおっしゃってみえますね。

(部会長)

「地域の教育力向上と連携・協力の強化について」種々ご議論いただき、ありがとうございました。

次の課題「幼児期からの一貫した教育の推進」に参りたいと思います。この課題も非常に大事な視点です。ご議論をお願いいたします。

(委員)

基本的な質問で申し訳ないんですが、ここでいう「幼児教育」とは、どういうことをいうのでしょうか。「幼児が教育を受ける」ということの捉え方ですが、この場では要するに「幼児は教育を受ける対象である」ということで良いんですか。

(事務局)

こちらの整理としては、家庭教育とは分けています。家庭外で行われる教育と捉えています。保育

所を教育というかどうかは問題があるんですけど、我々の認識としては幼稚園や保育所で行われる教育とか、子育て支援みたいなものを指していると考えています。

( 部会長 )

「幼児期からの一貫した教育の推進」という課題ですが、まず、ここで使われている「一貫した教育」という意味をどのように考えていくのか、ということに関してご意見をいただきたいと思います。

今は障がい児教育の場合、きちっと連携して、いろんなデータが上がってくるような仕組みが作られているんですが、もっと広範囲、教育全般について、この「一貫性」というのをどう考えていくかということで、ご意見があればお願いしたいと思います。

( 松坂総括室長 )

県で「幼保小中育ちのリレー事業」という、幼稚園から小学校・中学校につなげていく、つなぎの部分の取組をやっているんで、その話をちょっとさせていただきたいと思います。

( 事務局 )

県では、幼稚園、保育所、小学校、中学校を含めた「つながり」を大事にしたいということで、「幼保小中育ちのリレー事業」という取組をさせていただいています。29の市町に4年間に渡って、どの市町も1回は取り組んでいただくようにしています。予算的にも小さな事業ですが、「つながり」のきっかけづくりという考えで、取組を推進しています。これをきっかけとして、さらに地域で広まって、充実すればということでやっています。実際には、従来から行われている保育所とか、幼稚園とか小学校とか中学校のつながりという視点で、みんなが集まって話し合いをもっていたりとか、そういうものがないのであれば作っていただいて、話し合いをしたりとか、授業を見せ合ったり、課題を話し合ったりする機会を作ることなどを行っています。21年度は、名張市でも、「食育」をテーマに保育所も含めて話し合いや取組を進めていただいています。

( 委 員 )

名張市の教育振興計画では、「生きる力を育む教育の充実」、「教育を支える環境の整備」、「学校(園)・家庭・地域をつなぐ拠点づくり」という大きな基本的な3つの方向の中に、それぞれいくつかの施策が掲げてあって、その一番初めに「就学前教育(保育)から一貫し、連続した育ちを支える仕組みの構築」を、それぞれの方向、施策を示しながらやっていくと謳っています。それはなぜかと言うと、「就学前教育、保育から小学校へのギャップ」というのは、大変大きい部分があるからです。今まで個々には連絡会とかを持ちながら、子どもの実態などを話し合ってはいましたけれども、全体としてなかなか見えてこない。全ての子どもはどうなっているのかということは、なかなか把握できない。本当に小学校1年生、2年生の低学年が、1年経っても授業がうまく成立できないところがあるという課題があります。さらには、小学校から中学校に上がった段階で、不登校の数がものすごく多いという課題もあります。先生方の研修の場として名張市に教育研究所があるんですけども、今まででしたら、そこは小中学校だけのものでした。しかし「それではいけない」ということで、まずは公立幼稚園の先生方もそこに一緒に参画してもらって、やっていくことにしています。近い将来は保育所も入ってもらうことを考えています。同じ名張市の子どもが、小学校1年生に入ってくる訳だから、幼稚園と保育所を分けるのではなくて、一体のものとして考えて、一緒になって取り組んでいかなければいけない。そういう連携体制をどうやって構築していくのかということが、大きな課題であると思っています。

今年度については、食育を1つの突破口にして、就学前教育、保育の部分と小学校とを結びつけようということをメインに掲げながらしましたが、それだけではおさまらないですね。やっぱりもっと広い意味からそういうことをやっていく必要があると思います。すなわちそういうことを、小学校の先生と幼稚園の先生と一緒に、例えば国語科という教科を通して、幼稚園には国語科ってありませんけれども、言葉の発達という形の中で、同じにやってもらう。あるいは研究グループを組んで、小学校の先生と中学校の先生と、幼稚園の先生も入ってもらう。そうすることによって、いろんな話をしていくことができます。その途中で、子どもの実態の話が出てくる。「今まで子どものことについて、小学校の先生と話をする機会はほとんど無かった」という幼稚園の先生の話があって、「こういうことしてもらって大変よかった」という意見も聞きました。親にそういう話をしていくと、親も安心してくれます。幼稚園の保護者会に小学校低学年の先生を呼んでもらって、その実態を話してもらって、

親も安心してくれるということも分かってきたので、そういうことを進めていった方が良いのではないかと思います。

名張市教育振興計画を推進する基本的な考え方ということで、3つの基本的な理念を作っております。1つは「しっかりつなぐ育ちのバトン」ということで、縦の連続と一貫した理論に基づく生涯学習社会の実現を重視した教育。2つ目は「がっちり組む育ちのスクラム」ということで、横の連携、いわゆる学校・家庭・地域・関係機関が連携し合う教育。3つ目は「教育水準の維持・向上を還元するためのシステムの構築」ということで、名張市のどこの地域で生まれても、どの学校で教育を受けても、未来を展望し、一定の教育水準を保障する教育。こういう3つの基本的な理念を打ち出しながら、この計画を進めていくこととしています。行政では、計画は作ったらそれで終わりということが良くあるのですが、それを実現させるためにも、仮称ですけれども総合教育センターを最終的に立ち上げて、そこで理念なり、計画が実現できるような仕組みづくりをしたい。教育振興計画と教育センターが車の両輪のように取り組んでいくという計画を、今進めています。来年度初めから、パブリックコメントを求めながら進めていく予定です。名張市では幼稚園と保育所を一緒にしているんですが、就学前教育・保育から小学校へつなぎ、あるいは小学校から中学校へつなぎ、もっと言えば名張市は「子ども条例」を、議員立法で作ったんですけれども、その「子ども条例」は、0歳から18歳までを子どもと規定していますので、そこへ全部つなげていこうというスタンスで取り組んでいます。

(委員)

幼・保と小の連携って、どこでもやっているんですね。南が丘でだいたい140名から150名の1年生が毎年入ってくるわけですから、入学前の幼稚園児を一日体験させて、授業風景を見てもらったりしますよね。転入とか転出はあるにしても、先生方の顔を覚えて、授業風景を見て「幼稚園とは違うんだ。保育園とは違うんだ」という実感をさせる。中学についてはクラブ活動に参加させたり、交代で授業を受けたりとか、そのようにやっています。

(委員)

中高の連携ですが、三重県でも連携型中高一貫教育を、飯南高校とかいくつかの高校でやっています。あの中で高校の教員が中学校の授業に入るとか、逆の取組もやっていて、一定の成果を出しています。他県では同じような連携型で、人事交流していた県もあって、一定の成果というか、中高のつながりの成果があるという話を聞いています。人事交流も含めて、そういう中高一貫という制度の枠組みにとらわれるのではなくて、そこで培った成果はすべての地域へ発信するべきではないかと思えます。中高一貫教育という制度を使う使わないにかかわらず、中高の連携というのは大事なんですから、そのような方向でやっていけたら良いと思います。今、県の中高連携に関する検討委員会に出て、その4地域をどうするかしか議論されていません。取組の良いところはどんどん発信するというのをやって欲しいと思います。中高の人事交流については、例えば3年限度とかでも良いので、条件を設けて一度トライしてみても良いのかなと思います。

(委員)

先ほどおっしゃったみたいに、幼稚園の子どもたちが小学校へ入って交流を持つというようなつながりもあると思うんですけれども、合併する前の嬉野町では、まず保育園と幼稚園の職員の交流がありました。幼稚園ですと3歳からですので、3歳以前のお子さんを預かって見える保育機関の職員体制とかも、やっぱり勉強しておく必要があるということで、幼保の職員の交流がありました。私も保育園の方へ5年ほど行っていたことがあります。

幼小の連携は、幼稚園の子どもが小学校に行ったり、小学校のお子さんが幼稚園に来て交流を持つということはもちろんあるんですけれども、職員がまず「幼稚園の現場で子どもたちがどういうふう先生たちと関わっているか」を勉強した方が良いということで、小学校1年生の先生が1日ずつ交替で、幼稚園の状況をしっかり理解するということをやってきました。そういうことをしながら、子どもたちも幼稚園から小学校へ遊びに行ったり、小学校から幼稚園に来ていただいたりしていますが、先生たちの交流がしてあるので、子どもたちも安心感があって行き来しやすいようです。このような形で、連携を持っています。

また、幼稚園では小学校へ遊びに行くだけではなくて、小学校へ行くことの喜びや期待を育てることが一番大事だと感じていまして、「探検」にも行っています。小学校1年生の授業の中へ入れてもらって、授業の様子を見せてもらったりしています。帰ってきた子どもたちは「小学校へ行ったら、お

便所が男の子と女の子に分かれていた」とか、「メロディオンがすごく上手に吹けていた」とか、「先生が思ったより楽しかった」とか、言っています。そういう小学校へ行く期待を持てるような活動が、本当の意味での交流かなと思っています。

(委員)

お聞きしたいんですが、公立の幼稚園と学校では連携が取りやすいと思うんですが、幼稚園の場合は私立の幼稚園も多いものですから、そのあたりはどうなのでしょう。

(委員)

嬉野町の場合は私立の幼稚園がなく、保育所と公立の幼稚園なんです。私立の保育所と公立の保育園、幼稚園との交流はあります。職員の交流はありませんが、子どもたちの交流はあります。

(委員)

私の住んでいるところでは公立の幼稚園がないんです。私の子どもも私立の幼稚園に行っていました。

(委員)

名張市も公立の幼稚園が2園で、私立が4つですが、なかなかその辺の壁は強いんです。一気に全部というわけにはいきませんが、今は特別支援教育を突破口として、その部分において公立も私立も同じスタンスで取り組み、コーディネーター同士の交流会もさせてもらっています。私立と公立の幼稚園同士の交流はあまりないんですけれども、小学校とは連携していかなければいけないということで、だんだんその気運は高まってきています。近い将来は保育所も、公立・私立の幼稚園も全部含めながらやっていこうというスタンスはできつつあるんですけれども、なかなか壁は厳しいところもあります。

(部会長)

終了時間になりましたが、何か特別にご発言をという方ございますか。よろしいでしょうか。無ければ、今日は非常に熱心にご議論いただき、ありがとうございました。これをもちまして終わらせていただきたいと思います。このテーマについては、今後もこの部会の関連するところで発言いただければありがたいと思っています。

今回は「社会教育・スポーツの推進」について、審議をしていただくことになっています。この審議を行うにあたって、次回までに揃えていただきたい資料のご希望がございましたら、お話しいただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。特にないようでしたら事務局に一任という事で、よろしくお話ししたいと思います。

次にその他の項目で、教育委員会事務局の方から何かございますか。無ければそろそろ予定の時間がきましたので、これをもちまして、本日の協議を終わりたいと思います。皆さん今日は熱心にご議論いただきまして、ありがとうございました。

(事務局)

多喜部会長、議事進行どうもありがとうございました。今回は「社会教育・スポーツの推進」がメインの議題になりますけれども、部会は「一つのテーマについて必ず2回は議論する」という運営方針にしています。今日皆さんからいただいた意見をある程度体系的に整理をして、次回お示ししますので、今日の議題を改めて議論していただく時間も取りたいと思っています。次回もよろしくお願い致します。特に「視点」に掲げた中で、今日ご意見をいただけていないところもありますので、その辺についても次回お話しいただければ幸いです。最終的にビジョンにまとめていくときには、他の部会の方の意見も入れていく必要がありますので、今日の資料の31ページ以降に掲げてある「他の部会の方の意見」も目を通していただいて、次回以降のご意見に反映させていただけるとありがたいと思います。よろしくお話しします。

次回会議の日程は、4月の中旬を予定しています。本日皆様から日程調整表をいただくお願いをしていますので、この後調整して後日連絡させていただきたいと思っています。御多忙中のところ恐縮ですが、よろしくお願い致します。推進会議の委員の皆様におかれては、3月19日に第4回教育改革推進会議がありますので、こちらの方もご出席よろしくお話しします。以上です。

ありがとうございました。

( 16 時 05 分閉開 )